

在日欧州人の居住空間学

低い天井と つきあいつ法。

住まい方に関して「センスがいい」という場合、欧米流のやり方を身につけているか、純日本流か、その両極である場合がほとんどのようだが、では日本に暮らす欧州人は、日本式の住まい方をどう消化しているのか。在日イタリア人が本国にレポートした、同胞たちの日本生活を紹介します。

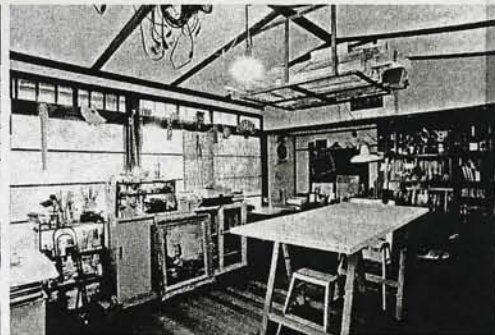
●文 ウッチェットロ・トスカネツリ La Gazette Fiorentina 紙特約記者
●訳 神保龍太 ●写真 野村浩司

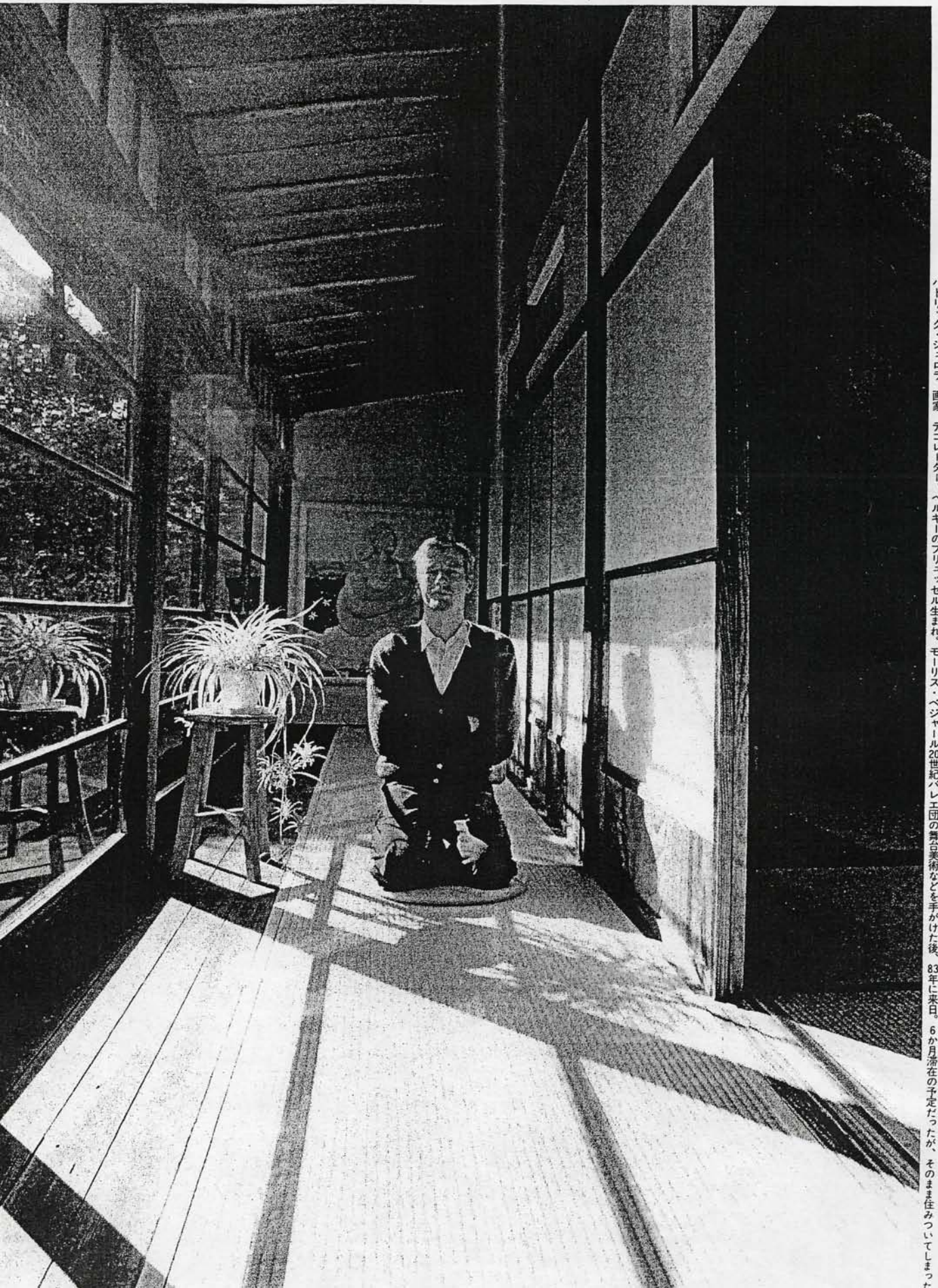
冬のシベリアからの冷たい高気圧が、オホーツク海から日本海にかけて進出してくると、ちやうど日本は冷蔵庫の中に入ったように、そのドラゴンの形をした背中に雪が降り積もり、腹に当たる太平洋の沿岸には寒風が吹き出す。地球上における東京の位置は、ヨーロッパの国々よりもはるかに赤道に近い（カイロと北緯が同じ）のに、その冬の寒さは考えられているよりもずっと厳しい。いみじくも日本アルプスと名づけられた竜の背骨に当たる山脈は、ヨーロッパのそれにも劣らない深い雪の中、竜の頭に相当する北海道は、太平洋に浮かぶ島々のひとつというよりも、シベリアの一部が切り離されたと考えたほうが、その冬の様子を想像するのに適当な表現だろう。

う。日本の冬をイタリアのそれと比較するならば、地中海に突き出した南部よりも、アルプスに面した北部諸州にずっと近い。当然、多くの若者たちがスキーリゾートに夢中になり、シーズンを待ちかねたようにTVコマースシャルにも、スキーファッションやツアーが溢れ出てくる。最も南に位置する沖縄の島々だけが、不幸なことにその動きから取り残されることになる。しかし、その代わりに1年を通じて海水浴ができるという、シチリアでも考えられないようなこともあるのだが、それも、アジア大陸の北から吹きつける季節風の影響から遠ざけられているという、ちよつとした恩寵のおかげでもあるのだ。その日本の冬の寒さに対して、夏の暑さは

リフォームが常識。眼力と粘りで 幽霊屋敷を誰もが羨む空間に。

パトリックさんの現在の住まいは、鎌倉の安養院の近くにある。敷地は250坪くらいだろうか、築60年の日本家屋。1室あった洋室をアトリエとして使用、ほかはすべて和室で、彼自身、彼の母、兄、伯父のペインティングが飾られている。裏はすぐ山になっており、その山の洞穴から水が湧く。もちろん、この洞穴はワインカーブとして使用。10年以上にわたって放置されたままだったので、パトリックさんが最初にここを訪れた時は庭は荒れ放題に荒れ、家もあちこち崩れていたが「ヨーロッパでは直して住むのが当たり前」と2か月かけて住めるようにした。家主が友人の知り合いということもあって、家賃は彼の言い値で決まった。「最初に見た時、5円でも高いと思うくらい」誰も見向きもしなかった物件。「夏はあまりここにいたくないよ。湿気がすごい。だから夏だけ、どこかほかのところへ行く」って、パトリックさん、この家は夏の別荘として建てられたのですよ。





パトリック・シエロラ、画家、デコレーター。ベルギーのブリュッセル生まれ。モリス・ベジャール20世紀バレエ団の舞台美術などを手がけた後、83年に来日。6か月滞在の子だったが、そのまま住みついてしまった。